

# 色紙書式

尾 上 柴 舟

色紙をいはゆる色紙として書いたもので、現存して最も古いものは藤原定家の書いたといふ小倉色紙であらう。定家の歌名が高いのと、その書風に一種枯淡の趣があるので、甚しく有名になり、御家の寶物として、その紛失に連關して、一代の忠臣義婦が活躍するなど、劇にも仕組みられて觀客の涙を誘ふにも至つてゐる。

しかし、小倉色紙以前の色紙はいはゆる色紙として書かれたものではない。その一は冊子の斷片である。その他は卷物の斷片である。冊子に歌を書いた。それがいつしか散逸して、一面に一首（時には二首）を書いたものが、色紙と呼ばれた。卷物に書いたものが切斷せられて一紙一首となつたのも、また色紙と云はれた。而してそれらが某々等名家の名を附して、諸家に秘藏せられて今日に及んでゐる。

元來、色紙とは色彩ある紙の意である。今日定まつてゐる豎七寸横六寸の色紙等の稱ではない。しかし、今日はこれになつてゐる。従つてその書法も生すべきである。

小倉色紙以後色紙の書法とも云ふべきものがいつしか生じた。乃ち散らし書の法はこれである。立石、藤の花、雁

の亂れ等、その形によつて書方が出來た。しかし、たゞ技巧に過ぎて、參考にはなるが、専らそれに依るべきではない。近衛豫樂院は、月次色紙形を書いて二十四様の變つた體を作つてゐる。素直な立派なものもあるが、數が多いために、無理な、不眞面目なものもある。豫樂院の大手腕でも、猶かやうな始末である。後の書法などは、書に志あるものは、殆んど顧みずして可なりであらう。

全體今日は復古の時代である。従來も復古は唱へたが、猶中途半端なものであつた。眞の復古は今日に於いて起つてゐる。草假名は平安朝のほどいゝものはない。この時の一片一紙も、猶云ふべからざる價がある。況んや、その散らし書の、後にいふ色紙の態をしたものは、無價の寶珠、人間のものでない心持さへする。今日色紙を書くものは必ずこれを範としなければならぬ。決して、後世の方式的のもの、技巧のものに顧慮してはならぬ。これをすれば、たゞ氣品を下し、弊竇に陥るのみである。

今こゝに平安時代の劇蹟の色紙の模範すべきものを例示し、その書き方を説明してみる。勿論古人の意氣は自分にはない。云ふところは、穿鑿に過ぎるものもあらう。しかし、その意の幾分かは現はし得ると信じてゐる。

第一と第二とは紀貫之の筆を傳へられる寸松菴色紙である。

第三と第四とは小野道風の筆と傳へる襷色紙である。

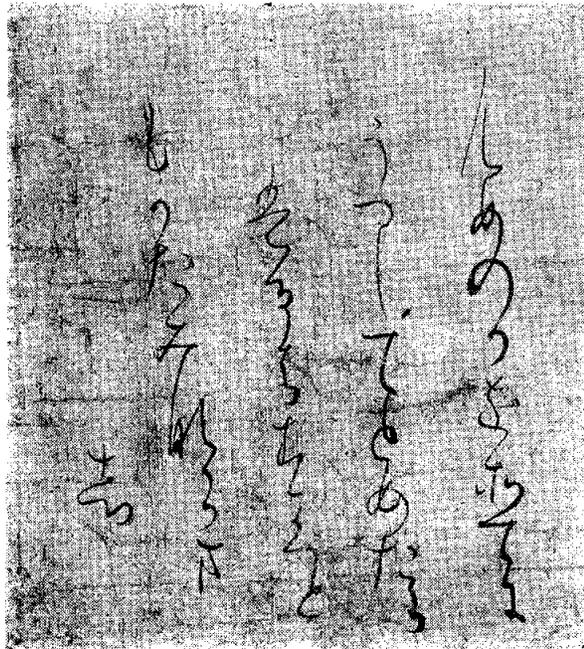
第五と第六と第七とは藤原行成の筆と傳へる升色紙である。

第八と第九とは藤原公任の筆と傳へる堺色紙と大色紙とである。

第十は藤原行成の筆と傳へる色紙である。

第十一は藤原公任の筆と傳へる糟色紙である。

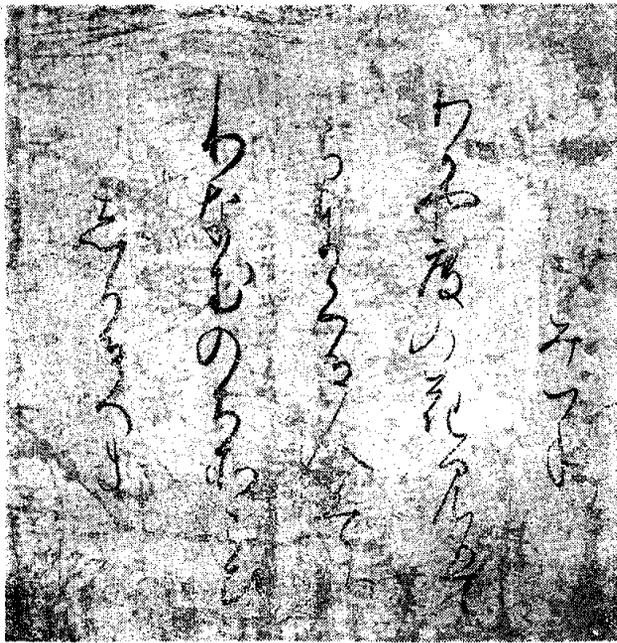
今順次これを解説する。



### 第一

歌は春の歌「梅の香を袖に移して留めたらば春は過ぐともかたみならまし。」である。これを五行に散らした。第一行は始をやゝ大きく、速度は緩く、眞直に下まで書きおろした。第二行は頭をやゝ下げて、これを始を大きく緩やかに、漸次やゝ速くして極めて下まで續けたが、終を右に傾かしめた。第三行は頭を一層低くして、速度は些か早く、しかも前行に倣つたので、終はおのづから右に傾いた。が、終筆は第一行よりも高くした。第四行は、頭が行を趁つて下り來つたので、第二行以上に上げ、しかし第一行と同水平にならぬやうにして、やゝ速く書き下した。が、終筆を第三行よりもやゝ高くした。しかも、前行に準じて全體を右傾せしめた。この右傾の度は順次に強くなつたので、最後には左端に大きな空白が出来る結果を生じた。この空白を「志」の一字を少しく大きくし、し

かも第四行の終よりも位置を高く書いて巧みに埋めて歌を終つた。で、全體を通觀すると、半開いた扇の形で上が廣く下が狭く、それで居て各行の上が整はず、下が附かず、参差としてゐるところに多大の風情があるが、更に最後の一字で、傾いた扇形は全體眞直な形と變じて矩形の隙間もなく埋まつてしまつて居るところは、云ふべからざる妙味

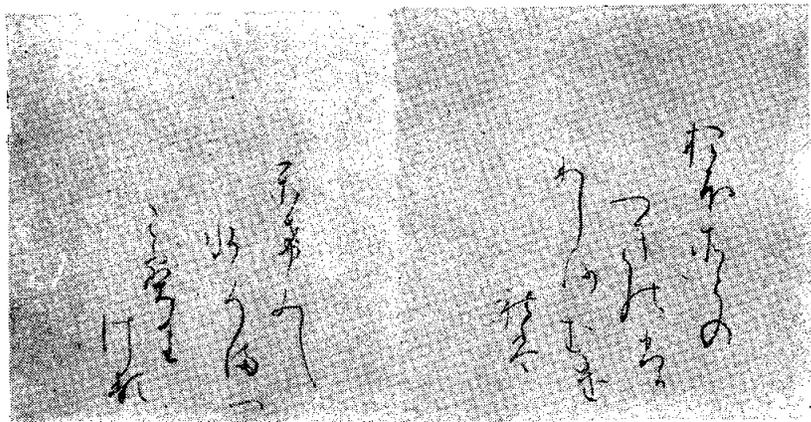


がある。その上に各行、上は緩やかに下は速く、處々濃く多くは薄く、緩急の具合濃淡の程度が、極めて適當で、目に快く心に響くものがあるのは能手にあらざれば出來ぬところである。況んや、かやうな小色紙に對すると手が萎縮して、字もおのづから小さくなるものであるが、毫もその氣がなく、大きく大膽に書き上げ書き下して紙外にも溢れむとしてゐるのは、熟達の度の尋常ならぬのを示してゐる。

## 第二

第一と同じく春の歌、「躬恒□わが宿の花見がてらに來る人は散りなむ後ぞ戀しかるべき。」を五行に書いた。第一行は先づ名を眞直に書いた。第二行は高くやゝ左に傾かして更に右に轉じた。で、全體は弓なり

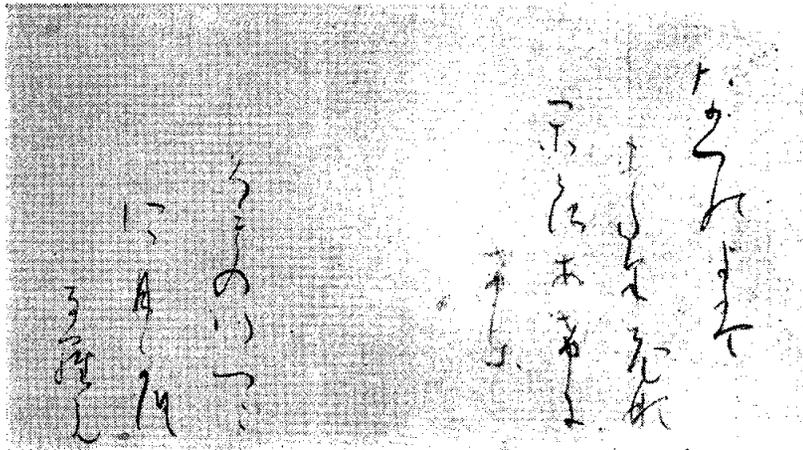
になつた。その終は窮まる如くに見えるが、窮まらず悠然と筆を收めた。第三行は頭を少し低く、が眞直にして、前行と離れる如き態度を見せながら、急に最後の一字を右に寄せて、第二行との間に出来た缺を補はしめてゐるのは巧慧であらう。第四行は前行よりも高く書き初めて中途から右に傾けて、前から生じた右邊の缺を補つてゐる。第五行は前行よりも低く書き初めて、これは大體垂直にして、前行と即かずまた離れぬ態度を取らしめてゐる。以上のやうで、此一紙は第一と異なつた趣を見せてゐる。第二第四行の濃は第三行の淡を挿んで目を聳てしめる。こ



の濃淡は、緩急と自然に一致して、全體の調和の妙を示してゐる。

### 第三

冬の歌「大空の月の光し寒ければ影見し水ぞまつ氷りける。」を八行に書いた。二頁であるので、まづ第一頁に初二三句を書いて、まとめることをした。第二頁に第四五句を書いてそれをまたまとめることをした。この兩頁を對照せしめて、全體の統一を作り上げた。まづ第一頁の第一行の「おほぞらの」は大體垂直に書いたが、最後を些か右に轉じた。第二行は前行よりも低く書いたが、前行に準じて最後を右に轉じた。第四行は第二行よりも高く眞直に書き下したが、前行に倣つて終を右



に曲げた。第五行は前行よりも大いに低く書き始めたが、今度は垂直にした。而してこれが第一行の書き出しと相應じて、こゝで立派な統一が出来上つてゐる。最後の行がこの位地を取らなかつたならば、全體が散漫なものとなつてしまつたであらう。

第二頁の第一行は第一頁の第四行と相對する位地から書き初めたが、それも終を右に傾かしめてゐることが、第一頁の第二三行と同様である。第二行は第一行よりも低く書き出してそれも終を右に傾かしめた。第三行は前行よりもやや高く書き出して、全體を稍右曲せしめた。第四行は前行よりも低く、これも稍右傾せしめた。この各行ともに、終が右傾しつつ列んだところに調和が生じて、第二頁はまとまつてゐる。この各頁が高低參差し、濃淡の度が増してまづ小統一があり、また小統一があり、而して大統一があるところが、筆者の技倆である。

#### 第四

夏の歌「夏の夜はまだ宵ながら明けにけり雲のいづこに月隠るらむ。」を書いた。これも、第一頁に四行、第二頁に三行に分けて書いたのであつて、各頁が各小統一をしてゐることは第三の通である。第一頁の第一



## 第五

清原深養父の「杏花と云題を□逢ふからも物はなほこそ悲しけれ別れむことをかねて思へば。」を六行に書いた。第一行は垂直に題を書いた。第二行はやゝ高くから書き出して終までに至つた。第三行はやゝ低く書き初めて、これも大體垂直に至つたが、墨が盡きたので終の二字目で附けた。第四行は前行よりもやゝ高くこれも垂直に書いた。第五行は思ひ切つて低く書き出して、やゝ右に傾けて終とした。全體が垂直を理想にして眞面目に書いたことは、第四のやうである。沈著の趣がすべてにあつて、流暢でありながら、悠然とした風情は及ぶべからぬものがある。

ことに第一行の最初、第二行の初、第三行の終から續いて第四行の濃は、その他の淡と著しく映發して、全體に十分に活氣を與へて、觀者の眼を醒まさせてゐる。

## 第六

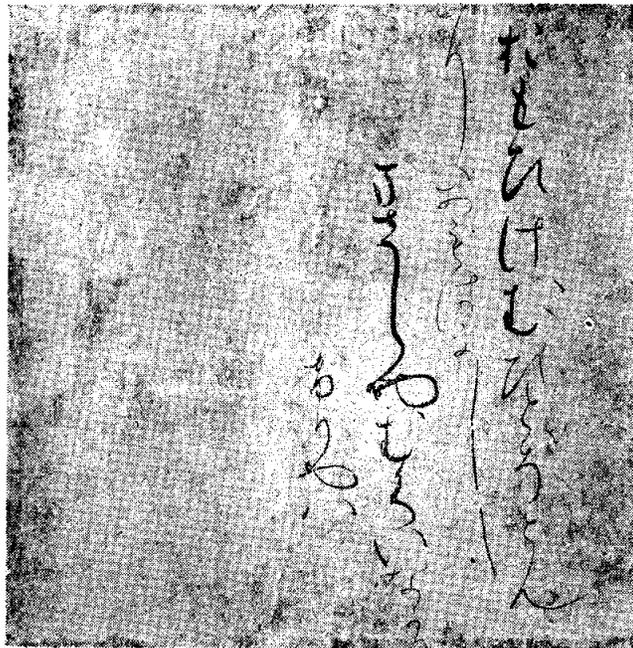
前者と同じく清原深養父の歌「今は、や戀ひ死なましをあひ見むとたのめし事ぞ命なりける。」を四行に書いた。第一行は極めてゆつくりと垂直に書き下した。そのまゝ第二行はやゝ低く書き初めて、終までまた垂直にした。墨が盡きないので、漸次線條は細くなり薄



くなりつゝ、字形も小さくなりつゝ、續いた。而してこれを第一行に密接せしめた。これは、第三行を遠く離して、第四行を一層それと密接せしめむとの意圖から發してゐる。第三行は思ひ切つて高く、垂直に一氣に書き下した。こゝで第一行からの墨が盡きたので、しかし餘りの字數が少ないので、多くは附けずして、第二行よりも低い高さから第四行を書いた。そして、密接せしめた結果は兩行の混合を來して、時にはこれが主となり、前行を従とせしめるまでに至つた。この放膽的所行は著しい効果を生じて、觀者をして神驚かしめる。變化を欲する人はこれを宗とすべきである。

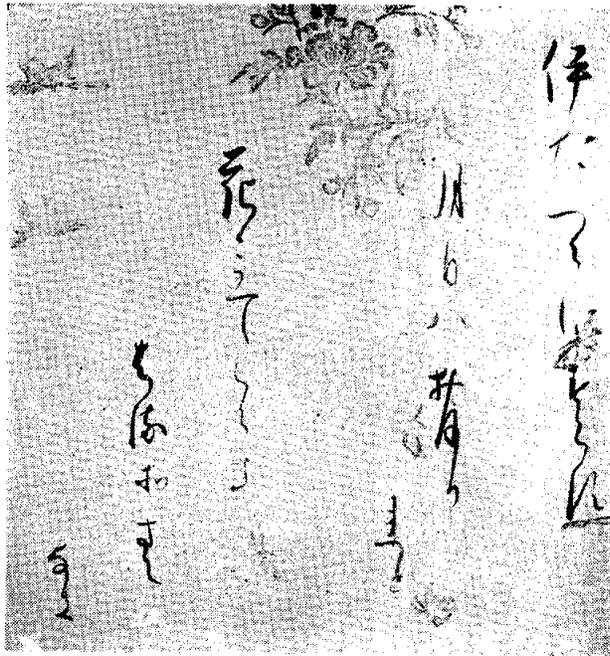
## 第七

同じく清原深養父の歌「思ひけむ人をぞともに思はましまさしや報なかりけりやは。」を四行に書いた。第一行は高く書き初めて殆んど垂直とした。第二行は思ひ切つて高く、ことに最初及び最後に修長の文字を置いた。この二つが全體に暢達を感じを著しくした。第三行はやゝ低く、前行の最後が右曲したのを承けて、中途から思ひ切つて右傾せしめた。これもまた變化を起さしめ



たのみでなく、右の余白を十分に補つた。第五行は、十分に低く、前行に準じて垂直として全體を収めた。而して全體が右に偏して左を空白を廣くしたのは、冊子を書き來つたその終が、おのづから此くの如くなつたのであつて、敢へ

伴  
た  
て  
し  
は  
も  
も  
も  
も



て故意にしたのではない。今日これに做つて見るのも一興であらう。しかし、この一紙の生氣は、その線條の流暢明快であるにもあり、緩急疾徐の適度なのにもあり、各字の大小の配合の巧みなのにもあるが、更に濃處の突如としてあり、淡處と相對して、細大の妙云ふべからざるところにある。故意に此の如くすれば、厭味に陥るであらうが、模範としては上乘なものである。

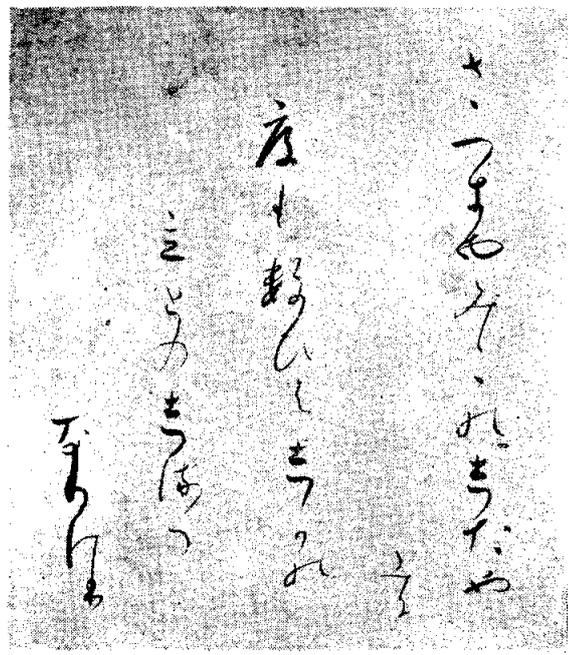
#### 第八

賀の歌「いたづらに過ぐす月日は多かれど花見て暮らす春ぞすくなき。」を六行に書いた。全體をゆつくりと、急遽の態度なく書かうと考へたものと見えて、第一行の初めを獨草的にして漸次連綿にしたが、第二行はやゝ低く起筆して、猶獨草的にした。その終は連綿としたがすぐに止め、第三行に低く轉じた。これで小統一が眞面目の中に出來上つた。間を大きく明けて、第四行に

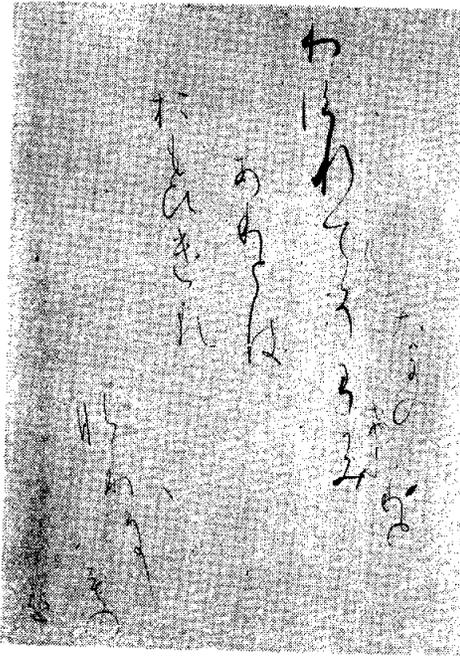
入り、大體獨草的に垂直に書き、第五行に入り、やゝ低くして猶獨草の態度を改めず、第六行を低くして收結して、こゝでまた小統一をつくつた。而して初の小統一と相合して、大統一を作り上げた。この風は學び易くて、その結果は破綻を見せぬので、後世これを逐ふものが多く、今日色紙と云へば、すぐこの體を書くのが多い。眞面目ではあるが變化が、なくて興味の多くない形である。こればかり模するやうでは、面白い境地には達せられない。

第九

「五月やみ木の下闇にともす火は鹿のたちどしるべなりけり。」(拾遺集には初句「五月山」とある。)を五行に書いた。これも、第八と同様に眞面目にといふ豫想の下に書いたと見える。第一行は獨草的に、上から殆んど下までに及んだ。第二行はいはゆる本草もくしきで、その傍に附書したが、猶眞面目の態度を變じない。第三行は高く、一層沈着に前の態度を繼承して第四行に及ぼした。第五行は勢に乗じたので、思はず連綿となり、他の垂直的のと異なつて右傾して、興味を發せしめた。猶しかつめらしい口上を述べつゝ、最後に破顔一笑した様子である。「し」の重複して、ことに同形であるのは、單調に過ぎてゐる。これは筆者も悔を貽したところであらう。



「忘れてぞ我身ありとは思ひける谷の煙となりにしものを。」の一首を八行に書いた。最初の一行はやゝ右寄りに、緩やかにやゝ右傾しつゝ書き下した。第二行はやゝ低く書き初めて、殆んど垂直にした。第三行は前行よりも高くして右傾せしめた。これだけではやゝ散漫の弊があるが、第四行を低く右端に垂直にし、第五行を低くして、第一行と



密接せしめ、更に右傾して右の空白を補つたので、變化が著しく見える。第六行は第三行の右傾してゐるのに伴つて右傾せしめて、大いに低く左端の空白を補つた。更に第七行もそれに準じて、右傾したのを垂直に直し、而して第八行の一字を垂直に置いた。これによつて、散漫の弊はすつかりなくなり、全體が餘裕ある統一をして、しかも觀者の意思の外に出でゐる。更に一々、勁健で、流暢で、明快清爽の極を盡くしてゐる。この技術に達するには非凡の天分を要する。たゞ

## 第十一

源順の「弓射る處□春深き山にいはば梓弓弓風にさへ花の散るらむ□四月神祭る處□神のます森の下草風吹けば



際きてもみ(な)祭る  
 頃かな。』の二首を上  
 下に分けて書いた。

眞中に破り繼の一直  
 線が、天河の如く斜  
 に通つてゐるところ  
 から、歌はおのづか  
 ら二ヶ處に書かれね  
 ばならなかつた。

第一首の第一行の  
 歌は低く直に、第二  
 行は高く、第三行は  
 それより低く、且つ  
 前行に接して下まで  
 及ぼし、三行で一の  
 小統一を作つた。間

を置いて、第四行をやゝ低くして、眞直に、第五行をそれに接して低く、最後の二字を左に附記してまた一の小統一を作つた。第六行は直にその最後の二字を附記して、また小統一をつくつた。この小統一は他の小統一と相調和して、大統一をなしてゐることは見て明らかである。

第二首も、第一行のやゝ低い題と、第二行のやゝ高く眞直に書き下したのが、第三行の密接したのとで小統一をなしてゐる。第四行も、やゝ高くして第二三行の間から起筆し、眞直に下して次の二字を本草もてきの體として小統一をつくり、第五行の第三行よりすこし低く初めて垂直に下したのと相對し、更に前の小統一と合して大統一をなしてゐる。二首の色紙は少ない。これは立派な横範である。

以上の十一種は、平安朝の色紙を盡くしてゐるのではないが、その主なものは含んでゐる。寸松菴色紙、續色紙、堺色紙、大色紙、又は升色紙、槽色紙等には他の種類がある。これらを悉く参照せられるならば、草假名の散布の妙を感じ得るのみでなく、自得して、應用するに十分であらう。(完)